

Schemes of Risk Evaluation (1) Expert judgment

ここまで主にリスクの見積もりやリスクの認知についてさまざまな立場を見てきた。これらの知見はリスクの評価や最終的なリスクの管理に関してどういう含意を持つだろうか？

1 リスク評価のさまざまな手法

シュレーダー=フレchetteはリスク評価のさまざまな手法を批判している。(Chs. 6-10)

専門家判断戦略(Expert judgment strategy)

専門家の判断する本当のリスク(real risk)と素人の判断する知覚されたリスク(perceived risk)を分け、専門家の判断する本物のリスクだけがリスク評価の際に問題になるという考え方(p.78)

確率戦略 (probabilistic strategy)

どんな合理的な人にとっても致死性の実際の確率 (actual probability of fatality)とそのリスクをさけることに付与される価値とは線形な関係(linear relationship)を持つという考え方。(p.90)

ベイズ主義ないし功利主義的戦略(Bayesian or utilitarian strategy)

効用の期待値を最大にする(maximize the expected value of utility)行為を選ぶのが正しいという考え方(p.101)

生産者戦略 (producer strategy)

産業や生産者の側のリスク(producer or industry risk)と公衆のリスク(public risk)を比較する際に、前者のリスクを最小化し、後者を最大化するという考え方。type I error を犯すより type II error を犯した方がいいという考え方(p.133)

孤立主義戦略(isolationist strategy)

時間・空間的に自分たちに近いところにあるリスクを拒否し(reject risks close to them in space or time)時間・空間的に遠いところへおしやろうとする考え方(p.147)

シュレーダーフレchetteはこれらの戦略をいずれも批判する。功利主義については次回別に論じる。生産者戦略・孤立主義はこの授業ではとりあげない。

2 専門家判断戦略

・ 専門家判断戦略では、専門家と一般人の判断が食い違って論争になった場合、一般人のリスク認知の影響を軽減する(mitigate the impact of risk perception)という方向で解決が図られる。

・ リスクは技術的なリスクに還元できるという考え方をとりがち（社会的インパクト social impacts が無視されがち） p.78

・ 社会的インパクトにあたるものは「認知を原因とするインパクト」(perception-caused impact)として認識されることもあるが、捉え方として不適切

この戦略に対するシュレーダー=フレチェットの反論

・ あらゆるリスクは「知覚されたリスク」(all risks are perceived) (p.79)

・ ただしその中には現実のリスクもあるので相対主義は含意しない (p.80)

[だったら perceived and real risk と perceived and unreal risk を区別すればすむ?]

・ リスクの確率は特に「知覚されたもの」としての側面を持つ

- リスクの確率(probability)はリスクの頻度(frequency)を反映しない（理論的に計算された確率と実際の頻度は必ずしも対応しない）

- リスクの確率は大変おおまかで不正確 (rough and imprecise)

- 社会的リスクの中には定量化できないものも多い(not amenable to quantification)

- リスクという概念自体が理論的な概念(theoretical concept)なので経験的に確証できない

- リスクの知覚がリスクそのものに影響を与える自己成就的予言(self-fulfilling prophecy)としての側面を持つ

- 専門家も素人と同じくらい主観的要素を持つ（カーネマンらの明らかにした representativeness の誤謬に陥りやすいことなど）

・ ほんとうは現実のリスクと知覚されたリスクの区別がないのにあるかのように思い込むと、望ましくない帰結が生じる。論争の源をあやまって同定してしまい、素人をリスク評価から締め出すという結論にもなりかねない。

・ リスクを誰かにおしつける際には、インフォームドコンセント(informed consent)と埋め合わせ(compensation)が必要(p.86)。そうした判断には潜在的被害者も参加する必要があるし、埋め合わせは潜在的被害者たちからみたらリスクに対してなされる必要がある。

3 確率戦略

この戦略では、一般人のリスク判断は確率の見積りのところでは誤っていると考えがち。非常に低い確率の出来事を大きく見積もってしまうために専門家の判断とずれると考える。

シュレーダー＝フレチェットの反論

- ・ 多くの場合、確率は問題ではない。(Probabilities are not the problem)
 - スターやウィップルが引用する証拠はよく検討すると確率見積りの誤りを示してはいない。
 - Otway の研究では対立を生んでいるのは価値 value や利益 benefit の評価(p.91)
 - Lawless の研究が示しているのは、対立が生じるのは uncertain な場合であり、certain hazard については対立がない。(p.92)
 - Fisherhoff らの研究では不平等に分配されたリスク(inequitably distributed risk) や深刻な帰結 (severe consequence) が一般人のリスク評価を左右する。(p.93)
 - probable ではなく possible であることが問題 (どんなに弾が出る確率がひくくてもわざわざロシアルーレットに参加しないというのは合理的でありうる)
 - 交渉力が等しくない場合には、確率ではなく単に被害の大きさだけで賠償責任を考えることはそれなりに正当化できる。(p.94)

- ・ 確率はしばしば uncertain である。専門家の見積りも大幅に食い違うことがある
- ・ 専門家が素人との意見の違いを価値の違いではなく確率の見積りの過ちのせいにしたいのは、自分たちの仕事が科学的だという見かけを維持したいため。(p.98)